

児童養護施設で暮らす小学生のコラージュ表現

高畑 和子*・金丸 隆太**

(2011年9月15日受理)

Collage Presentations of Elementary School Students in Children's Home

Kazuko TAKAHATA and Ryuta KANEMARU

キーワード: 児童養護施設, コラージュ, 被虐待児

本研究の目的は、児童養護施設で暮らす子どもたちを援助する方法としてのコラージュ技法の可能性を探ることであった。施設養育児童15名と家庭養育児童15名のコラージュ制作30作品と施設養育児童の継続制作32作品、計62作品について、(1)施設養育児童と家庭養育児童のコラージュ表現の比較、(2)問題行動、生育歴と作品との関連の検討、を調べた。また心理療法としてのコラージュ療法の可能性を見るために、(3)継続的にコラージュを作ることによる作品の変化、を調べることを目的とした。

施設養育児童と家庭養育児童の間で「はみ出しなし+重ね貼りあり」の貼り方、人間の切片の出現頻度において、差がある傾向が見られた。被虐待経験の違いにより、切片数に差がある傾向が見られた。困り行動の違いにより、継続制作における切片数の変化に違いがある傾向が見られた。

施設内での心理療法において、コラージュ療法を導入することが有効である可能性を示す結果が得られた。

はじめに

子どもたちの表す問題行動を見ていく時、その背景に虐待(abuse)の意味するところである、不適切な養育という視点に行き着いていくことが多くある。虐待を受けた子どもたちの多くが児童福祉施設に入所することになるが、一般家庭養育児童の中にも被虐待体験のある児童が小学生で15.2% (森田, 2004) 見られるという報告は児童養護施設の子どもたちだけではなく、広く現代社会における不適切な養育を受けている子どもたちの問題としても捉える事ができる。しかし、山脇(2003)は虐待されてきた子どもの治療は現実にはスムーズにはいかないとし、治療の困難性を述べている。特に1999年に厚生労働省が児童養護施設への心理療法担当職員配置に乗り出して以降、この治療の難しい子ども達への施設における心理療法については、様々な理論や技法を用いて、数

*茨城大学教育学部附属教育実践総合センター

**茨城大学大学院教育学研究科

多くの研究が発表されてきた。そういった理論・技法の一つに芸術療法としてのコラージュ療法がある。

心理援助場面におけるコラージュの活用は、西丸(1949)、山中(1986)などの報告に端を発し、森谷による1987年の発表(森谷, 1988)、杉浦・入江による1989年の発表(杉浦・入江, 1989)などによって「コラージュ療法」として確立された。以降、この応用範囲の広い芸術療法はありとあらゆる場面での実践が報告されてきたが、近年、被虐待児への心理療法としての報告が相次いでいる。牧田(2001)は「被虐待児に対するコラージュ療法の試み」において、短期間に攻撃衝動が消失した事例を報告している。渡辺(2002)は「コラージュ療法による養護施設児の行動変化の研究」において、「問題行動が多い子どもにも、また抑うつ的で自分の気持ちを外に出せない子どもにも、どちらにもコラージュ療法は有効であるということになるのではないか」と報告している。

コラージュ療法が持つ、侵襲性の低さ、安全性の高さについては上述の各研究を始め、中井(1993)、中村(1999)、岡田・河野(1997)などによっても報告済みであり、児童養護施設に入所する子ども達、特に虐待によるストレスからの回復といった繊細な介入において有効であろうことは十分に仮定できる。本研究では、児童養護施設においてコラージュ療法を実践する際の基礎資料を報告するために、特に小学生に焦点を当ててコラージュ表現の特徴を探る。

目的

児童養護施設で生活する小学生のコラージュ表現の特徴を見いだす事を目的とした。先行研究においてなされてきたコラージュ作品の形式的分析、内容的分析方法を用いて、心理アセスメントとしてのコラージュ技法の可能性を探ることを目的に、(1)施設養育児童と家庭養育児童のコラージュ表現の比較、(2)問題行動、生育歴と作品との関連の検討、を調べた。また心理療法としてのコラージュ療法の可能性を見るために、(3)継続的にコラージュを作ることによる作品の変化、を調べた。

方法

1. 対象

【施設養育児童群(以下、施設群)】児童養護施設X園の小学生希望者15名(男子6名、女子9名、平均年齢9歳10ヶ月)。この15名はさらに施設職員へのインタビューによって、「困り行動(あり6名(男子4名、女子2名)、なし9名(男子2名、女子7名))」「被虐待体験(あり7名(男子2名、女子5名)、なし8名(男子4名、女子4名))」という分類もおこなった。

【家庭養育児童群(以下、家庭群)】施設群と性・年齢をマッチングさせた小学生15名(男子9名、女子6名、平均年齢9歳3ヶ月)。

なお両群とも倫理的な配慮として子どもの自由意思による参加とし、辞退も自由とした。

2. 実施時期と場所

2006年6月～11月。施設群は児童養護施設X園セラピー室，家庭群は各家庭内や学童保育施設内で実施した。

3. 材料

統一材料（切片シートA3版6枚と切片の入ったボックスをワンセット）を用意した。切片の内容は「動物，キャラクター，人，乗り物，物体，植物，食べ物，風景」とした。他に台紙として八つ切り画用紙，糊，はさみ，色鉛筆，クレヨンを用意した。

4. 手順1

筆者と子どもが一对一となり，筆者から「〇君（さん）の好きな絵や写真を切って画用紙の好きな場所に自由に貼って作品を作ってみてください」と自由制作を促した。色鉛筆とクレヨンによる描画や彩色は自由とした。50分を目安に制作を終了してもらい，できあがったコラージュ作品と一緒に鑑賞しながら，制作者の今の気分，作品についてのお話，題名，自己イメージ，欲しかった切り抜きなどを聞いていった。

5. 手順2

施設群の中で希望者を対象に，手順1と同様の手続きで週1回程度のペースで，継続的にコラージュを作成してもらった。4回以上継続して作成した8名（男子4名，女子4名）を，継続作成群とした。この8名のうち困り行動ありは4名（男子3名，女子1名），なしは4名（男子1名，女子3名）であった。また被虐待体験ありは5名（男子2名，女子3名），なしは3名（男子2名，女子1名）であった。

結果

(1) 施設養育児童と家庭養育児童のコラージュ表現の比較

1. 分析項目

杉浦（1994），佐藤（1998），今村（2006）を参考に以下の項目を設定し，手順1で収集されたコラージュについて家庭群15作品と施設群15作品の間に，各項目について違いがあるかどうか分析した。

【形式分析項目】「切片数」「はみ出し」「重ね貼り」。

【内容分析項目】「制作タイプ」「テーマ性」「作品における『動物』『人間』『植物』『物体』『乗り物』『食べ物』『自然風景』」。

2. 分析結果

分析結果をTable1に示す。「切片数」「はみ出しの有無」「重ね貼りの有無」については，施設群と家庭群の間で有意差はなかった。「はみ出し+重ね貼り」については，これらの有無を組み合わせた4パターンのうち，「はみ出しあり+重ね貼りあり」「はみ出しあり+重ね貼りのない」「はみ出しな

Table1 施設養育児童と家庭養育児童のコラージュ表現の比較

	施設群 (n=15)	家庭群 (n=15)	p
平均切片数 (S. D.)	10.5 (8.0)	11.3 (8.5)	n. s.
はみ出しのある作品数 (%)	4 (27%)	2 (13%)	n. s.
はみ出しのない作品数 (%)	11 (73%)	13 (87%)	
重ね貼りのある作品数 (%)	4 (27%)	11 (73%)	n. s.
重ね貼りのない作品数 (%)	8 (53%)	7 (47%)	
「はみ出し+重ね貼り」パターンの作品数 (%)	1 (9%)	6 (40%)	p < .10
その他のパターンの作品数 (%)	14 (60%)	9 (60%)	
テーマ性のある作品数 (%)	12 (80%)	11 (73%)	n. s.
テーマ性のない作品数 (%)	3 (20%)	4 (27%)	
動物のある作品数 (%)	15 (100%)	14 (93%)	n. s.
動物のない作品数 (%)	0 (0%)	1 (7%)	
人間のある作品数 (%)	10 (67%)	4 (27%)	p < .10
人間のない作品数 (%)	5 (33%)	11 (73%)	
植物のある作品数 (%)	9 (50%)	7 (47%)	n. s.
植物のない作品数 (%)	6 (40%)	8 (53%)	
物体のある作品数 (%)	8 (53%)	3 (20%)	n. s.
物体のない作品数 (%)	7 (47%)	12 (80%)	
乗り物のある作品数 (%)	5 (33%)	6 (40%)	n. s.
乗り物のない作品数 (%)	10 (67%)	9 (60%)	
食べ物のある作品数 (%)	3 (20%)	2 (13%)	n. s.
食べ物のない作品数 (%)	12 (80%)	13 (87%)	
自然風景のある作品数 (%)	2 (13%)	5 (36%)	n. s.
自然風景のない作品数 (%)	13 (87%)	10 (64%)	

し+重ね貼りなし」については施設群と家庭群の間で有意差は見られなかったが、「はみ出しなし+重ね貼りあり」においてフィッシャーの直接法により有意傾向 ($p < .10$) が見られた。このパターンは杉浦 (1994) の研究から年齢とともに増加する事が認められ発達の指標と考えられている。施設群は家庭群と比べて「はみ出しなし+重ね貼りあり」の作品が少ない傾向にあると言えた。

「制作タイプ」は佐藤(1998)をもとに、コラージュ制作過程のタイプを「テーマを見つけてそれに合わせて切片を構成するタイプ」と「好きなものを思いっくままに貼るタイプ」としたが、施設群と家庭群の間で両タイプの数に有意差はなかった。

「テーマ性」は作品の題の有無と作品にテーマ性があるかどうかについて検討し、その作品にテーマ性があるかどうかを総合的に判定した。施設群と家庭群の間に、テーマ性の有無について有意差はなかった。

「作品における『動物』『人間』『植物』『物体』『乗り物』『食べ物』『自然風景』については、これらの内容に関する切片が貼られたか否かを比較したが、『人間』のみ施設群と家庭群の間でフィッシャーの直接法により有意傾向 ($p < .10$) が見られた。施設群は家庭群と比べて人間が貼られる作品が多い傾向にあると言えた。さらに施設群 15 名を困り行動あり群となし群で分けて『人間』の出現頻度を比較したところ、困り行動あり群は 6 名中 6 名が人間を貼り、なし群は 9 名中 4 名が人間を貼っており、フィッシャーの直接確率法の結果困り行動あり群が有意に多く人間を貼る傾向が見られた ($p < .10$)。

(2) 問題行動、生育歴と作品との関連の検討

1. 分析項目

杉浦 (1994) を参考に以下の項目を設定し、手順 1 で収集されたコラージュについて困り行動あり群 6 作品となし群 9 作品の間に、これらの項目について違いがあるかどうか分析した。同様に被虐待体験あり群 7 作品となし群 8 作品の間の違いについても分析した。

【形式分析項目】「切片数」「はみ出し」「重ね貼り」。

2. 分析結果

分析結果を Table2, Table3 に示す。「はみ出しの有無」「重ね貼りの有無」については、困り行動あり群となし群の間においても、被虐待体験あり群となし群の間においても、有意差はなかった。

「切片数」については、困り行動あり群となし群の間では有意差がなかったが、被虐待体験あり群となし群の間では t 検定により有意傾向 ($p < .10$) が見られた。被虐待体験あり群はなし群に比

Table2 困り行動とコラージュ表現の比較

	困り行動あり群 (n=6)	困り行動なし群 (n=9)	<i>p</i>
平均切片数 (S. D.)	12.3 (10.1)	9.3 (6.7)	<i>n. s.</i>
はみ出しのある作品数 (%)	3 (60%)	1 (11%)	<i>n. s.</i>
はみ出しのない作品数 (%)	3 (50%)	8 (89%)	
重ね貼りのある作品数 (%)	3 (50%)	1 (11%)	<i>n. s.</i>
重ね貼りのない作品数 (%)	3 (50%)	8 (89%)	

Table3 被虐待経験とコラージュ表現の比較

	被虐待経験あり群 (n=7)	被虐待経験なし群 (n=8)	<i>p</i>
平均切片数 (S. D.)	15.0 (9.5)	6.6 (3.6)	$p < .10$
はみ出しのある作品数 (%)	2 (29%)	2 (25%)	<i>n. s.</i>
はみ出しのない作品数 (%)	5 (71%)	5 (75%)	
重ね貼りのある作品数 (%)	2 (29%)	2 (25%)	<i>n. s.</i>
重ね貼りのない作品数 (%)	5 (71%)	6 (75%)	

べて切片数が多い傾向にあると言えた。

(3) 継続的にコラージュをすることによる作品の変化

1. 分析項目

杉浦 (1994) を参考に切片数について、手順2 で収集されたコラージュ (8 名, 4 回分, 計 32 枚) を対象に継続作成により変化が見られるかどうか分析した。

2. 分析結果

分析結果を Table4, Figure1, Table5, Figure2 に示す。困り行動あり群となし群の間において、平均切片数の変化の仕方に差が見られた (2 要因の分散分析により交互作用が有意傾向 ($F(3, 18) = 2.534, p < .10$))。単純主効果検定を行ったところ、群間の主効果が見られ、回数の主効果はなかった。

Table4 困り行動と継続制作による切片数の変化

	困り行動あり群 (n=4)	困り行動なし群 (n=4)
1 回目の平均切片数 (S.D.)	12.7 (10.9)	13.8 (8.0)
2 回目の平均切片数 (S.D.)	10.5 (11.1)	7.8 (4.3)
3 回目の平均切片数 (S.D.)	10.8 (7.6)	13.0 (9.6)
4 回目の平均切片数 (S.D.)	4.3 (5.0)	17.8 (14.0)

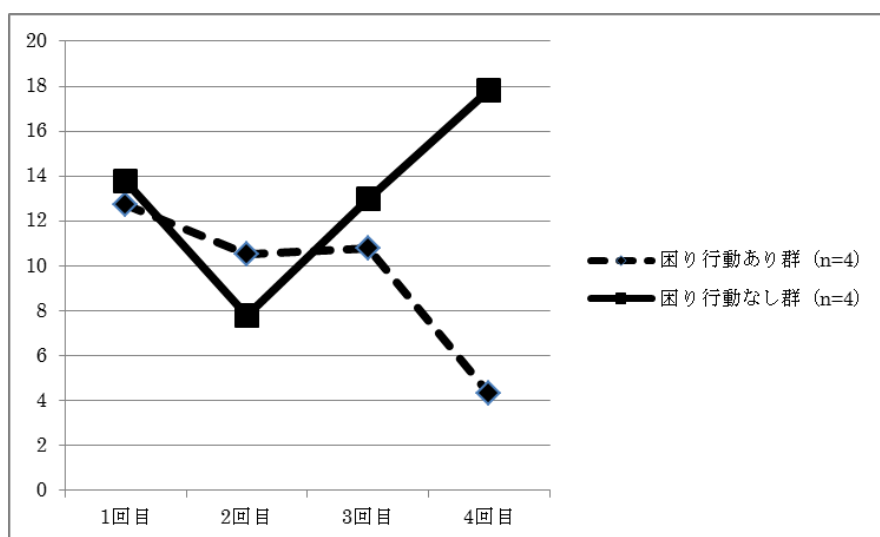


Figure1 困り行動と継続制作による切片数の変化

Table5 被虐待経験と継続制作による切片数の変化

	被虐待経験あり群 (n=5)	被虐待経験なし群 (n=3)
1回目の平均切片数 (S. D.)	15.4 (10.9)	9.7 (3.2)
2回目の平均切片数 (S. D.)	10.2 (9.8)	7.3 (4.6)
3回目の平均切片数 (S. D.)	13.2 (9.5)	9.7 (6.1)
4回目の平均切片数 (S. D.)	9.4 (12.7)	13.6 (13.2)

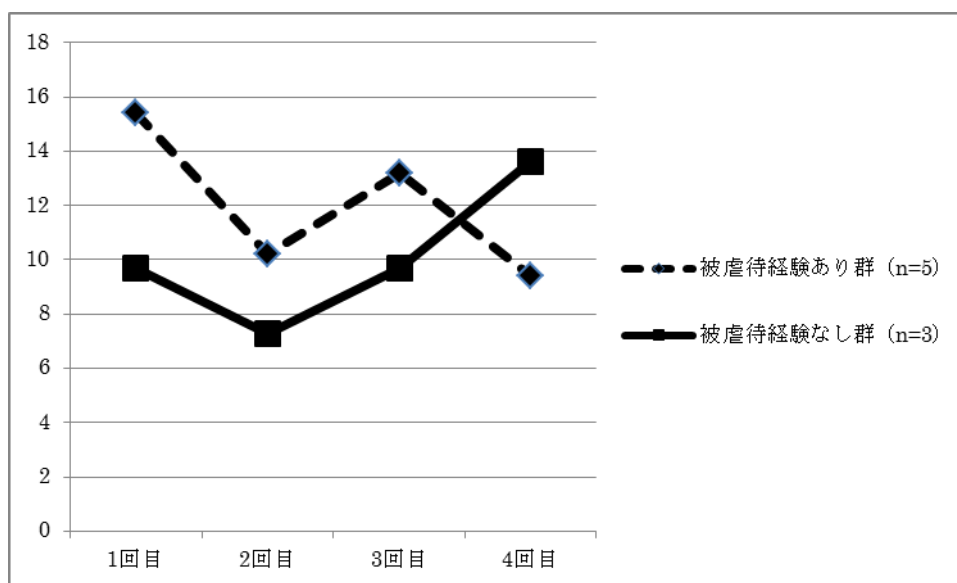


Figure2 被虐待経験と継続制作による切片数の変化

考察

1. 切片数

杉浦 (1994) の 1989 年から 1992 年にわたって実施した発達の基礎研究結果において、切片数は発達とともに増え高齢者群で極端に減少する傾向が見られた。ほぼ同様の結果が滝口 (1999) らの研究においても認められている。これらのことから切片数は作成者の心的エネルギーと関係していると考えられている。本研究結果では、家庭群平均枚数 11.3 枚 (SD=8.5)、施設群 10.5 枚 (SD=8.0) と両群には有意差は見られず、また杉浦 (1994) に報告された小学生の平均枚数 11.6 枚 (SD=5.8) と近い数値であった。したがって、本研究において切片数に表された心的エネルギーは家庭群、施設群には違いがなく平均的な小学生の数値であったと言えるであろう。しかし、施設の中の被虐待体験のある児童とない児童を分けて比較すると、被虐待体験のある児童の方が 15.0 枚 (SD=9.5) に対し、被虐待体験のない児童は 6.6 枚 (SD=3.6) と平均切片数の違いに有意傾向が見られ、被虐待体験なし群に比べて、被虐待体験あり群の方に心的エネルギーが高い傾向がうかがえた。

被虐待体験のある児童がなぜ切片数が多く、心的エネルギーが高い傾向にあるのか、児童達がコ

ラージュ制作後に語ってくれた感想をあわせながら考えてみると、筆者という新しく出会った大人に対して、一生懸命制作活動をすることで自分を認めてもらいたいという表現であったのかもしれないと思われる。Figure3 (切片数 28 枚) を作った児童Aは「うれしい。疲れたけど楽しかった」と感想を述べている。他方、彼らの満たされてこなかった思いが空間を埋め尽くすという強迫的な表現行動として切片数に現れたという見方もできる。初回 15 人のコラージュ制作者のうち、被虐待体験児は 7 人で、そのうちの 5 人が継続 4 回のコラージュ制作をしていることを考え合わせると、かなり高い割合で (71%) 被虐待体験児がコラージュ制作に興味を持ち続けたことになる。彼らは制作後の感想にて、「貼るのが楽しかった」「楽しかった」「きれいに作れてうれしいです」「かわいくできてよかった」「もう 1 回やりたい、貼りたいものがある」「うれしい」「細かいとこよくできた」などと述べている。これらの感想からもコラージュ制作そのものが持つ遊びのおもしろさや制作の達成感が継続の動因になっていることは十分うかがえる。一方で施設での心理臨床経験を豊富に持つ森田 (2006) は、「新参者に対する極端な人懐っこさは施設入所した (被虐待の) 子どもたちの行動特性」であり、その行動は「大人の都合によって決定されたわけのわからない環境の中で抱いてきた恐怖と不安からくる反応」であり、「自分の存在, 自分の生活環境を維持するための行動であって、精神的な安定感からくる愛着行為ではない」と述べている。こういった各要因を総合的に考えると、被虐待児はいわゆる無差別愛着的な反応として、目の前の初対面の人の注意を引くこともねらいながら、コラージュ制作にエネルギーを注いでたくさんの切片を貼っていくと仮定できる。



Figure3 被虐待体験あり群のコラージュ作品

継続制作による平均切片数の変化については困り行動あり、なし群で交互作用の有意傾向が見られたが、数値の変化からは困り行動あり群は切片が減っていき、困り行動なし群は切片が増えていく傾向が推測できる。両群はコラージュ制作を続けることで異なる内的変化が起きている事が想像される。杉浦 (1994) も「事例では初期の作品に切り抜き数が多く、問題が整理されてくると切り抜き数が減少するものが見られた。」と言及している。また渡辺 (2002) は「コラージュ療法はふだん問題行動が多い子どもには問題行動が減少する効果をもたらす、反対にふだん問題行動が少ない子どもには問題行動の増加が起こるといふ 2 つの効果をもたらす可能性が示唆された。」と報告している。これらのことから本研究の結果について、コラージュ制作を継続することで、困り行動あり

群は問題の整理により切片の減少が起き、困り行動なし群は抑えていたものが表現されたことにより切片の増加が起きたと解釈することも出来る。ただ困り行動なし群へのコラージュ導入が単純に表現の増加につながるとは言い切れず、慎重な考察が求められる。

2. はみ出しと重ね貼り

杉浦（1994）によると、「はみ出しは発達とともに減少し、枠の中にきちんと収めることができるかどうかは手先の器用さ、つまり運動系の発達との関連が一つある。」としている。重ね貼りについての杉浦（1994）の発達の研究結果は幼児、小学生が60%台、中学生でいったん減少し47.3%となり、高校生（60.3%）、成人（84.2%）でまた増加し、高齢者（34.6%）で減少するという変化曲線を示している。滝口ら（1999）の研究結果も概ね同様の変化曲線を描いている。しかし重ね貼りのもつ意味内容は幼児、小学生と高校生、成人では質が異なっているように思われる。そのことについて滝口らは「小学生の作品の中には技術の未発達や見通しの甘さから来るものも多く見られた。しかし、『重ね貼り』の効果をねらった作品数は小学2年、4年、6年と学年が上がるにしたがい、著しく増加する」と報告している。そこで、本研究結果を杉浦（1994）の研究結果に照らし合わせてみると、はみ出しは杉浦のデータが39%に対し、本研究の家庭群13%、施設群27%はやや少なく、重ね貼りは杉浦の62.2%に対し、家庭群の53%はほぼ近い数値だが、施設群の27%はかなり少ないことがわかる。今回は対象者数が非常に少ないので単純に比較はできないが、発達統計的には施設群、家庭群ともに、はみ出しは低めの比率でほぼ年齢相応とみられ、重ね貼りについては家庭群は年齢相応だが、施設群はやや低めと見ることができる。

本研究の対象児童では4名の施設児童、2名の家庭児童の作品にはみ出しが見られたが、その多くが意図的にはみ出しを使ったとは捉えられず、無造作に貼って、たまたま出てしまった、あるいは、その切片をそこにどうしても貼りたくて、結果として出てしまったという印象がある。その考察として、貼りたい切片を取り込みたいというエネルギーの強さが上回っていて、背後の台紙空間の枠が曖昧になっている事が想像され、切片の図と画用紙の地との関係として捉える事もできる。つまり、はみ出すということは図と地のバランスを取りながら作品を構成するという力が弱く、主観性の強さだけが前面に出てしまった結果として起きたと考えられる。構成力や統合力の弱さが、自己コントロール力の弱さにつながっていくとも考えられる。はみ出しをした4名の施設児童のうち2名は施設で困った行動が見られる児童であったが、そのうちの児童Bは5回のコラージュ制作全てにはみ出しが見られ（一例としてFigure4）、もう1人の児童Cは5回の制作のうち1回だけはみ出しがみられた（Figure5）。児童Bは微細運動能力の発達の問題、すわなち器用さの問題としてはみ出しが起きていると解釈できるし、児童Cは心理的な問題としてはみ出しが起きていると解釈できる。例えばFigure5では本人はおそらく無意識的にこの位置に「イルカ」の切片を貼ったと思われるが、出来上がった作品を箱庭の空間図式（秋山、1982）にあてはめると、「精神、神」と考えられている上部から滑り込むように「イルカ」が入り込んでいる姿ははみ出している事に意味をもち、非常にメッセージ性の高いものをそこに筆者は感じ取る事ができる。はみ出しの解釈はこの様に個別に見ていくと、逆に一般化は難しくなる。

重ね貼りをした作品は家庭群で15作品中8作品、施設群で継続制作も含めて47作品中15作品であったが、これも無造作に貼って、たまたま重なってしまったという作品と、意識的に切片同士を

重ねることでストーリー性を持たせる目的で重ねたという作品に分けることができる。前者は技術の未熟さによるものとして、重ね貼りを発達のアセスメントとして捉える事ができる。後者は切片を構成する力や想像力などが要求されるので、発達的には進化した力としてみる事ができる。具体的にはFigure5のように「乗る」「触る」「持つ」「戦う」「食べる」などがあり、こういったことを2つの切片の関係により表現する方法として重ね貼りが使われている。



Figure4 毎回のみ出しが見られた児童の作品



Figure5 1回だけのみ出しが見られた児童の作品

3. 「はみ出しなし+重ね貼りあり」パターン

杉浦 (1994) の研究によると、「はみ出しなし+重ね貼りあり」パターンは幼児では 25%, 小学生 29%, 中学生 37%, 高校生 57%, 成人 79%と年齢とともに割合が高くなり, 高齢者で 24%と下がることを示している。このことは、「はみ出しなし+重ね貼りあり」パターンが健常発達ラインにおける, 発達の指標として考えられる事を示している。

本研究においては前述の結果で述べたように, 施設群の 7%は家庭群の 40%, 杉浦 (1994) の 29%

のいずれと比較しても低い事がわかる。コラージュ制作における「はみ出しなし+重ね貼りあり」を発達の指標とするならば、家庭群に比べて施設群のほうに人数が少ない傾向があり、施設群の発達が遅れている可能性を示唆できる。このことははさみや糊の使用、創作体験、自由遊びの体験、および受容体験の少なさが背景にあるのではないかとも考えられる。なおコラージュ継続制作における施設群の継続者8人の「はみ出しなし+重ね貼りあり」パターンの出現頻度は、1回目と2回目が12.5%で、3回目と4回目は37.5%にあがっていた。この数値を杉浦（1994）と比較すると、1、2回目はやや少ないが、3、4回目になると中学生相当の割合になっている。コラージュ制作体験を重ねることで制作活動に創意工夫がみられるようになり、構成能力や微細運動の発達が促進される可能性がある。

4. テーマ性

作品にテーマ性が見られた児童の割合は家庭群 73%、施設群 80%と両群に差は見られなかった。約8割前後の児童がテーマ性が見出される作品を作った。杉浦（1994）の研究結果ではテーマ性ありの小学生は57%となっているが、この数値と比較すると、今回の結果はやや高いといえよう。しかし、杉浦は「カウントは判定者（筆者）が行い、作成者には作品のコメントをもらっていないものがほとんどである。そのため、本人に直接聞けば判定者が見逃した作品も出てくると予想され、実際はもう少し高い数値が出ると思われる。」と考察している。それに比べて本研究では①6人の評定者による作品のテーマ性の有無、②制作者がつけた作品の題の有無、③製作過程における2つのタイプ、という3方向の組合せによって作品にテーマ性が見られるかどうかを判定したことに留意しなくてはならない。テーマの例としては動物を使った戦い、調和、共存、仲良しといった心理的なテーマ。広い世界、自然、海、旅行など視野が外に向かっているテーマ。衣、食、養育といった生活のテーマ。自分が大切に思っている物のテーマなどがあつた。

5. 作品の内容

施設群、家庭群ともに最も選ばれた切片の種類は動物であつた。杉浦（1994）、滝口ら（1999）では最も選ばれた切片の種類は人間で、それぞれ70.7%、80%の出現率となっており、次が動物となっている。動物が児童に好まれて選ばれる事は杉浦（1994）の研究結果（63.4%）、滝口らの研究結果（70%）からも示されているが、本研究の結果は人間類選択よりも有意に高い比率で動物が選択されていることに注目したい。これはなぜだろうか。先ず本研究のコラージュ作品の材料は研究者側が選び用意したものであるため、制作者の気に入った人間類が少なかったのかもしれないということがあげられる。雑誌から自分で切り抜くか否かの違いである。しかし施設群の人間類選択はどう説明できるだろうか。本研究の結果から施設群は家庭群に比べてより多く人間類を選んで貼る傾向が見られ、施設のなかでも困り行動あり群はなし群と比べて人間類の選択、貼り付けが多い傾向が見られた。

Lerner & Loss（1977）は動物の切抜きを選択する理由として「要求や関わりが少ない関係を好み、人間よりも安全である。」という考えを述べ、彼らの研究結果から「臨床群（統合失調症者）の方が有意に動物が好まれるという傾向が示された。」と報告している。そして杉浦（1994）はコラージュ技法とロールシャッハテストとの共通点として、内容分析における人間反応や動物反応の発達曲線

はロールシャッハの各々の反応の発達曲線と類似していることを明らかにしている。子どものロールシャッハ研究者である松本(2003)の報告を援用すると、現代の子どものM反応(人間運動反応)の産出は減少しているとのことである。これらの考え方や指摘を参考にして考察をすると、17年前(杉浦は1989年の作品)や7年前(滝口は1999年の作品)の児童と比べると、2006年の今回の児童たちには人間類より動物類を好んで選ぶような時代背景、社会状況としての共通の育ちの環境があるのかもしれない。そのような中でも施設群の児童たちは家庭群の児童たちよりは人間類の選択が多く、施設群の中でも困り行動あり群に人間類の選択が多い傾向があることが見いだされた。本研究のコラージュ材料がある程度限定的だったことは考慮に入れながらも、時代と作品内容の関係は常に研究対象となるテーマだと提言したい。

限界と今後の課題

本研究は対象者の数が少なく、群間の有意差は出にくかった。本研究で示された各指標の偏りの傾向を足がかりに、今後対象者数を増やした実証研究をしていくことが必要だろう。

引用文献

- 秋山さと子. 1982. 『ユング心理学へのいざない』(サイエンス社).
- 今村友木子. 2006. 『コラージュ表現—統合失調者の特徴を探る—』(創元社).
- 木村晴子. 2005. 『箱庭療法』(創元社).
- Lerner, C. & Ross, G. 1977. "The Magazine picture collage : Development of an objective scoring system," *American Journal Occupational Therapy*, **31** (3), 156-161.
- 牧田浩一・田中雄三. 2002. 「被虐待児に対するコラージュ療法の試み」『芸術療法学会誌』**32** (1), 21-29.
- 松本真理子. 2003. 『子どものロールシャッハ法に関する研究—新たな意義の構築に向けて—』(風間書房)
- 森田展彰. 2004. 『被虐待児童における精神症状・問題行動及び内在化された養育者のイメージ—養護施設・児童自立支援施設の児童と一般小中高校児童の比較—』(こども未来財団調査報告).
- 森田喜治. 2005. 『養護施設と被虐待児—施設内心理療法家からの提言—』(創元社).
- 森谷寛之. 1988. 「心理療法におけるコラージュ(切り貼り遊び)の利用」『精神神経雑誌』**90** (5), 450.
- 中井久夫. 1993. 「コラージュ私見」森谷寛之他編『コラージュ療法入門』(創元社) 137-146.
- 中村勝治. 1999. 「コラージュ療法の独自性」森谷寛之他編『現代のエスプリ』**386**, 42-50.
- 西丸四方. 1949. 『精神医学入門』(南山堂).
- 岡田敦・河野荘子. 1997. 「コラージュ表現とその治療的意義について」『名古屋造形芸術大学紀要』**3**, 61-72.

- 佐藤静. 1998. 「カラージュ療法の基礎的研究—カラージュ制作過程の分析—」『心理学研究』
69(4), 287-294.
- 杉浦京子・入江茂. 1989. 「カラージュ療法の試み」『第21回日本芸術療法学会抄録集』19.
- 杉浦京子. 1994. 『カラージュ療法—基礎的研究と実際—』(川島書店).
- 滝口正之・山根敏宏・岩岡眞弘. 1999. 「カラージュ作品の発達的研究(集計調査)」『現代のエス
プリ』386, 175-185.
- 渡辺真由美. 2002. 「カラージュ療法による養護施設児の行動変化の研究」『応用社会学研究』
12, 49-76.
- 山中康裕. 1986. 「分析心理療法(ユング派)」吉松和哉編『精神科MOOK15 精神療法の実際』(金原
出版) 23-33.
- 山脇由貴子. 2003. 「子どもの保護・回復と治療」中谷瑾子他編『児童虐待と現代の家族』(信山社
出版) 201-207.